普段の生活の様々な場面でキャッシュレス決済が活用されているが、時間貸し駐車場も例外ではなく、キャッシュレス決済に対応する駐車場が増えている。さらに、現金回収が不要になるなどのメリットから「キャッシュレス決済専用」とする駐車場も珍しくはなくなってきた今、そんな市場の要求に応えるべく、サニカからキャッシュレス決済専用精算機が登場した。

サニカ 集中精算機 PCM1000 “キャッシュレス専用機”が新たに登場

■PCM1000 キャッシュレス専用機

株式会社サニカ（山梨県南アルプス市）の集中精算機「PCM1000」に、新たにキャッシュレス専用機が加わった。PCM1000は2023年の登場当時からキャッシュレス決済にオプションで対応、現金決済との併用が可能だったが、現在、都市部を中心に時間貸し駐車場の料金支払いでもキャッシュレス決済の割合が多くなってきたことから、「キャッシュレス決済専用駐車場として運営し、売上金の回収及び釣銭補充のコストを抑制したいという運営事業者様からの要望を受け、キャッシュレス決済専用機の正式投入に至りました」（株式会社サニカ 取締役営業統括担当役員 石田 滋氏）

導入後の追加コストも抑制

このキャッシュレス専用機には現金決済ユニットがオプションとして設定され、後から追加することができる。これにより、導入後の費用負担を最小限に抑制することを実現している。これまでもPCM1000の導入後にキャッシュレス決済ユニットを後付けした事例は多くあったとのことで、今度はその逆に「キャッシュレス決済専用駐車場として開設後、『やはり現金決済にも対応したい』と判断された場合、精算機本体はそのまま、後から現金決済機能を追加していただけます」（同 東日本営業本部 販売管理部 主事補 森口紘行氏）

精算機本体は入れ替え不要

ちなみにPCM1000の従来機にキャッシュレス決済ユニットを追加し、「現金決済ユニットを取り外して『キャッシュレス専用』とすることも可能です」（同氏）

つまり、PCM1000導入時がどの仕様（組み合わせ）であっても、後から追加や取り外しを行うことで――精算機本体を入れ替えることなくそのままで――同じ仕様にたどり着けることになる。キャッシュレス決済が加速度的に普及する過渡期にある今、かつ、競合する近隣駐車場の影響を受けやすい時間貸し駐車場にとって、非常に大きなメリットではないだろうか。キャッシュレス決済ユニットは2種類が用意され※1、どちらも交通系ICを含む電子マネーから二次元バーコード決済、そしてクレジットカード※2まで広くカバー。これらの決済プラットフォームとのシステム連携は、サニカ独自の遠隔管理システム「SEAPS Cloud」により実現している。

株式会社サニカ
東日本営業本部 販売管理部 主事補 森口紘行 氏
取締役 営業統括担当役員 石田 滋 氏

■ キャッシュレス決済システム
写真はME-20。交通系ICを含む電子マネー、二次元バーコード決済、そしてクレジットのタッチ決済※2に対応。電子マネーとタッチ決済は画面にタッチ、二次元バーコード決済はスマートフォンのバーコードを画面下の読み取り部に近づければOK。画面に案内が表示され、音声案内もあるので迷うこともない。

多彩な決済方法に対応しているので、普段使い慣れている決済方法が選べるはずだ（画面は機能説明用のもの※2）

■ 車両検知センサ内蔵ポールスタンド CO200
ロック板（フラップ板）を用いない時間貸し駐車場も増えているが、これは設置性に優れたセンサー内蔵スタンドで、ループコイルの埋設が不要。このため開設までの工期短縮、初期コストの縮減が可能に。キャッシュレス精算機とセットで導入する例も増えているとのこと。

4つの「窓」でどんな仕様にも対応

PCM1000の本体を見てみると、大型ディスプレイの下に4つの「窓」――ユニット装着部――があることがわかる。キャッシュレス専用機の場合、左上にキャッシュレス決済ユニット、その右隣にサービス券等の二次元バーコードの読み取りユニットが装着されている。そして現金決済ユニットをオプションで追加する場合、下の写真のように下段の左にコインチェンジャー（硬貨投入口）、右にビルバリ（紙幣投入口）が取り付けられる。このように“フル装備”であればすべての窓が埋まることになるが、そうでない場合は、フラットパネルで窓が塞がれる。導入したPCM1000の本体はそのままに、どの仕様にも変更できるのはこの4つの窓があればこそであり、運営事業者にとっては“安心の象徴”といえそうだ。

さらに本誌でも以前レポートしたが※3、このPCM1000は「SEAPS Cloud」によるソフトウェアのアップデートやカスタムが可能。運営事業者ごとの要望に合わせた機能も、現地での作業を伴わず、複数箇所であっても遠隔操作により一括で変更できるのは、大きなメリットだろう。

また、視認性に優れた10.1型カラー液晶ディスプレイは、保護パネル付きタッチパネルの操作性はもとより、「サイネージ機能を実装したことで待機画面で様々な情報発信ができるため、高い評価をいただいています」（石田氏）

運営事業者の企業ロゴやキャラクターの表示から料金改定の告知といった実用情報まで、様々な用途で活用できることが歓迎されているとのこと。

「DX」と「従来価値」をミックス

ところで、改めてPCM1000のキャッシュレス専用機を見てみると、本体下部に受け取り口があることに気づく。不要になったはずの釣銭受け取り口が残ったままのようにも見えるが、これは領収書の受け取り口。「精算機の設定状態を紙で出力して確認するという保守上の理由もありますが、とくに仕事で駐車場を利用される方にとっては、領収書はその場で、紙で受け取れたほうが便利なはずです」（石田氏）との判断から、領収書のペーパーレス化はしていないとのこと。

近隣店舗等との連携のもと、店舗から発行される料金割引サービス券や精算機で発行されるクーポンにも対応。その他データ連携など「SEAPS Cloud」を活用した駐車場のDXを実現する一方で、「領収書は紙で」という従来からの価値も尊重する。先に触れた「4つの窓」を含め、PCM1000は同社の姿勢が随所に表現されているといえそうだ。PP

※1：UPT1000F / ME-20　※2：ME-20のクレジットカード決済は年内対応に向け開発中　※3：本誌2022年12月号掲載

DATA | 株式会社サニカ　https://www.sanica.co.jp